

り戻しつつあった中央制御室で、2号機において「SW（補助冷却海水系）トンネルダクトサンプルレベル高」警報が発生した。続いて、15:37、2号機で「RVP（逆洗弁ピット）サンプルレベル高」警報発生した。同時に、1号機のD/Gがトリップした。運転員は「SBO（所内全交流電源喪失）」と叫んだ。電源関係の状態表示灯が点滅し、消えていく。警報表示灯や状態表示灯も消え、計器も読めなくなっていく。計器を見ようとしたが、次々と消えていき、最終的には中央制御室1号機側照明は非常灯のみ、2号機側照明は真っ暗となった。鳴っていた警報音も消え、中央制御室内は一瞬シーンとなった。最初は何が起きたか分からず、目の前で起こっていることが本当に現実なのかと疑いたくなるような状況であった。

- 同じ頃、原子炉保護系の電源復旧を終えた運転員2名が、現場確認のため2号機タービン建屋地下階の廊下を移動していると、突然現場の照明が消えると同時にD/Gの作動音が消え、停止した状況に遭遇した。運転員は、状況報告と自身の安全のため、サービス建屋2階にある中央制御室に戻ろうと考えた。途中、タービン建屋地下階では、D/G室の入り口水密扉ののぞき窓から水が吹き出していた。タービン建屋1階では、普段開いているサービス建屋1階の中央制御室に向かう廊下の扉が閉まっていた。二人がかりで押しやっとな開けたところ、海水が大量に流れ込んできた。運転員は、腰まで海水に浸かりながらも、中央制御室に向かった。サービス建屋1階は80cm程度水があり、近くにあったものが流れていた。階段を上り、ずぶ濡れのまま2階の中央制御室に戻った。
- 「海水が流れ込んできている」と大声で叫びながら、ずぶ濡れの運転員が戻って来たことで、中央制御室の運転員は津波の襲来を確信した。
- 1号機側は非常灯のみ、2号機側は真っ暗となった中央制御室では、当直長は、動作している計器や使用出来る設備が残っていないか確認をするよう指示した。運転員は、屋外パトロール用の懐中電灯や中央制御室に配備してあったバッテリー付き照明などの照明を集め、それらの明かりを使いながら計器の指示を確認していった。設備は状態表示灯が点灯し、中央制御室から操作出来るものを探していった。
- しかし、ほとんどの表示灯が消灯し、操作出来ない状況であった。戻り配管隔離弁（MO-3A）の開閉操作により原子炉圧力制御を行っていた1号機のICは隔離弁の状態表示灯が消灯し、開閉状態が確認出来ず、中央制御室からは操作ができない状態となり、運転員は動作しているかどうかわからなくなった。HPCIについても、制御盤の状態表示灯が全て消灯し、起動不能な状態であった。2号機については、直前に手動起動したRCICの制御盤の状態表示灯が消灯し、動作しているかどうかわからなくなった。HPCIは、制御